

会議議事録

事業名	平成26年度「職業実践専門課程」の推進を担う教員養成モデルの開発・実証
代表校	一般社団法人 全国専門学校教育研究会

会議名	第4回実施委員会、第5回開発・実証委員会、第6回評価委員会 合同委員会
開催日時	平成27年2月5日(月)、10:00~11:30(1.5時間)
場所	東京ガーデンパレス 3階「平安の間」
出席者	<p>①委員 浦山 哲郎、井本 浩二、佐竹 新市、安藤 喬、松井 祥高、 國分 義史、山崎 彰、川崎 千春、河原 成紀、中越 晃、 栗原 寛隆、川越 宏樹、片岡 均、坪内 浩一、山本絵里子、 鷺澤 文治、大平 康喜、伊藤慎二郎、岡村 慎一、飯塚 正成、 永井 真介、大城 圭永、中島慎太郎、龍澤 尚孝、小野 紘昭、 齋藤 進、山口 典子、日暮 薫、井戸 和男、三宅 英明、 山田 太、小林 昭文、信岡 誠三、長谷川綾子、</p> <p>②代理出席 芦澤 昌彦、上田 あゆ美</p> <p>③オブザーバー 鈴木 康之</p> <p>④事務局 下島 耕一、佐藤恵美子、花田香央理 (合計40名)</p>
議題	<p>議 事</p> <p>1) 開会</p> <p>2) 主催者挨拶</p> <p>3) 議題</p> <p>①各分科会における概要と成果報告 ・インストラクショナルデザイン分科会 ・アクティブラーニング分科会</p> <p>②評価委員からの評価</p> <p>③次年度にむけて</p> <p>④その他</p> <p>3) 閉会</p>

- 資料
- ・ I Dテキスト/指導書 (各1冊)
 - ・ A Lテキスト/指導書 (各1冊)
 - ・ 公開ホームページ概要
 - ・ 諸連絡

開式の挨拶 永井委員

主催者挨拶 浦山会長

I D分科会 岡村委員

職業実践専門課程を通じた教員の質保証・向上の推進を図るために、自分たちが学習することで、授業改善に活かせる手法として、インストラクショナルデザインを選んだ。これを広めるために、実効性のある方法の開発に取り組んだ。

日暮委員

はじめに、この事業の目的の説明

職業実践専門課程の推進にインストラクショナルデザインがなぜ適応するのか。

職業実践専門課程とインストラクショナルデザインの関係を俯瞰図によって説明

第1章 指導要領と実証講座実施マニュアル

事前研修についての説明

実証講座の内容について説明

第2章 実証講座実施記録

実際に行われた実証講座について

第3章 事前アンケート集計結果

全国の専門学校教師を対象にアンケートを行った

その内容と、集計結果に対する考察

60%以上の先生がインストラクショナルデザインを取り入れていたのが印象的だった。

第4章 事前Eラーニングコンテンツ

今回受講する先生達に事前に受けてもらった講義の内容説明

第5章 実証講座テキスト

テキストを見ながら中身の説明

第6章 実証講座参加者アンケート

アンケートの中身と集計結果の説明

第7章 講座の課題と今後の展望

今後の課題は3点

- 1 企業が求める人材とその人材を育てるための学習内容の合致性を高める
 - 2 企業側でのID活用の事例を調査し、企業研修の良い点を取り入れる
 - 3 学生の学習成果に対する検証（IDを活用した授業の効果性）
- 上記3点に対する今後の取り組み方の説明

AL分科会 伊藤委員

アクティブラーニング分科会の取りまとめ役としての挨拶のなかで、旬なテーマに取り組めたことへの喜びと感謝を述べる

小林委員

最初に両隣の人と名刺交換もしくは、近況報告

アクティブラーニング型授業（物理）を8年以上前から毎日してきたが、今では文科省の奨励もあり、アクティブラーニングの認知も上がり盛んになってきた。

開発の目的

一番重要なのは、工業化社会から知識基盤社会への転換を、ビジネス界だけでなく、教育界にも波及させることが重要。

専門学校で学んだ知識や技術は何十年も持つものではない。学生が日々成長していける人材、学習し続ける人材を育成する。その学習し続ける方法を身につけさせることが重要。

実証講座（2日間）のおおまかな流れの説明

アクティブラーニングの新しい定義（溝上教授）

アクティブラーニング型授業の定義について

殆どの先生方が程度の差はあるが、AL型授業を行っている。アメリカでは、伝統的授業から反転授業への転換が図られているAL型授業に取り組む目的として、ピーター・センゲのかかげる「つぶれない会社」になるには、「学習する個人」からチーム学習を経て「学習する組織」を作らねばならない。

AL型授業を通して、新しいリーダーシップスキルの育成

文科省の方針（現在の指導要領）の説明

AL型授業（物理・小林委員）のプロセス説明

高校生の反応は良く、成績は向上、教科書も早めに終わった

	<p> コルブの経験学習モデルについての説明 ALを始める10のコツの説明 ALの歴史的背景として、レグ・レバンス教授からアメリカでのマ ーコードモデルとして完成 アクションラーニングの定義についての説明 コルブの経験学習理論の説明 ピーターセンゲの組織学習開発理論との関わりについて説明 アクションラーニングセッションの進め方の説明 ALコーチの重要性、リーダーシップの新しい概念について これらの育成には、アクションラーニングセッションが効果的 </p> <p> 永井校長 評価委員からの説明 </p> <p> 芦澤委員 インストラクショナルデザイン実証講座の評価 職業実践専門課程制度との関連性について </p> <p> 企業との連携が最重要な点である。その連携の方法がしっかり 出来ていない中で、ひとつの解決方法として、今回の事業（I D・AL）がある。 </p> <p> 今回のプロジェクトは、教員研修モデルの作成・開発が目的であ り、どういう教員かというと、企業との連携の仕方を熟知して おり、教育課程に反映できる教員、を育成するための研修モデ ルを作成する事が目的である。「職業実践専門課程として企業等 のニーズを取り入れるカリキュラム、シラバスの作成が出来る 教員の養成が目的である。 </p> <p> 1、学科の到達目標 2、教育課程を定める 3、シラバス の作成 4、コマシラバスの作成 という4段階あるが、今 回の研修では3、4は出来ているが、1、2は不十分である。 </p> <p> 次の評価視点として、インストラクショナルデザインは、一般的 な教育機関や企業等でも活用されている理論だが、それを職業 実践専門課程の分野にどのように適用させられるか。 </p> <p> 今回の講座テキストは教育課程編成の方法論は出来ていないが、 シラバス、コマシラバス作成の方法論は詳しく解説されている。 テキストの表現上の問題として、「学習目標」「ロードマップ」「授 業計画」という文字が良くでていますが、それぞれどの水準での 使われ方をしているのかが受講生にはわかりにくかった。 </p>
--	--

実証講座の運営について、グループに分けて行われたが、違う分野の教師がグループを形成したため、学習目標やシラバス等の成果物をお互いが評価しにくかった。IDを一定期間経験した教師同士か、同じ分野の教師同士でないと評価しづらい。

また、実証講座の講師の成果物評価にも少し問題がある。講評がその場限りの印象が強く、受講生全員にわかる、または一般的に通用するものではなかった。全体的に成果物の評価という点で問題があった。

アクティブラーニングは小野委員のご協力をいただいて評価しましたが、インストラクショナルデザインとは違う視点で評価した。

今回の講座にアクティブラーニングとアクションラーニングセッションの二つが同時に行われたかが疑問。

リーダーシップ論、コーチング論、KJ法など、たくさん講座に含まれているかが疑問。小林委員だから可能な手法で、一般的方法論としては無理があると思う。

職業実践専門課程との関連性については、企業からの情報をもっとあって良かったのではないか。

総括と今後の展望について

IDはテキストの表現上の問題、研修運営上の問題、企業との連携という点を除けば、シラバス・コマシラバス作成の方法論は確立している。上記問題を修正していけば、専門学校の教員養成・研修として成立できる。

アクティブラーニングは、まず成功事例を見出して、そこから教育分野に適応できる方法論を確立し、次の段階で、企業との連携を行っていくべきである。

インストラクショナルデザインの目的の中で、「職業実践専門課程として職業実践的教育を行う上で、企業・業界が求める汎用的な能力の向上・・・」とあるが、そこは少し違うと思う。文科省は「企業・業界団体等との連携による教育課程の編成や演習・実習の授業運営等を推進するための研修教材を複数分野を対象として作成する」となっている。

永井委員

ホームページについては、明日の会議にて説明。

井戸委員

この事業はまだ道半ばといったところですが、とても重要で価値があると思うので、次年度以降も、じっくり時間をかけて取り組んでいくべき事業だと考えている。

会長挨拶

このプロジェクトをやって本当に良かったと思う。今回は本当に良いディベートを見たという思いがあります。皆さんの意見を参考に次年度もこのプロジェクトを継続して、より良いものを作っていたきたい。

永井委員

明日は13:30から分科会、14:00から成果報告会が70名程度の参加で開催予定。

以上